

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：33301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K20468

研究課題名（和文）不確実性の高い移動を伴う人びとの「まちの居場所」に関する実証的研究

研究課題名（英文）A study of "Machi no Ibasho(Third place)" in a mobility society: A case study of people living in multiple locations and high-frequency travelers

研究代表者

石川 美澄 (ISHIKAWA, Misumi)

金沢星稜大学・経済学部・准教授

研究者番号：50733672

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、不確実性の高い移動を伴う人びとの「まちの居場所」の獲得プロセスとその場所の特徴を明らかにすることを目指したものである。具体的な調査対象は、高頻度に生活拠点を移す複数拠点生活者ならびに生活拠点はほぼ変わらないものの頻りに旅行に出かける高頻度旅行者である。前者では各居住地に「まちの居場所」がある者が多かったが、一方で「どこにも居場所はない」者も一定数確認される等の研究成果が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、「まちの居場所」やサードプレイスに関する研究が、いわゆる定住人口である住民に偏りがちであること等を先行研究の整理で指摘した。その上で、複数拠点生活やワーケーションなど新しい生活様式が浸透しつつある社会での人びとの「まちの居場所」の実態について、量的・質的調査を通して一定の知見を提示できた点に学術的・社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study identified the process of acquiring a "Machi no Ibasho (third place)" for people that move either frequently or irregularly and the characteristics of that place. The first research target group included multilocation dwellers who frequently move their place of residence. The second study population included frequent travelers. In the former, for example, many of them had a "third place" in each place of residence.

研究分野：観光研究

キーワード：まちの居場所 サードプレイス 複数拠点生活者 高頻度旅行者 モビリティ社会

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の社会動向としては、子ども食堂やコミュニティカフェに代表されるような「まちの居場所」が同時多発的に開設されていた。「まちの居場所」に統一された定義はないが、その場所は「私的な場所でもなく、形式ばった場所でもなく、人が思い思いに居合わせられる場所。そして、新たに地縁を結びなおす場所」(田中 2019:10)であり、地域での人と人の関係性を築く拠点としても重要であった。

建築計画論や環境行動論、社会福祉論等の学術領域では、「まちの居場所」の運営方法や役割・意義・課題について調査研究が積み重ねられていた。「まちの居場所」は、利用者のセーフティネットとして機能したり、ありのままの自分でいられることによる精神的安定をもたらしたりする場所として極めて重要であった。また、まちのにぎわい創出の土台となるケースもあり、まちづくりの拠点としても機能していた。しかしながら、先行研究で取り上げられる「まちの居場所」の利用者の大半は、そのまちに生活拠点があるいわゆる「定住人口」としての住民だった。

一方、観光研究の領域では、日本が人口減少社会を迎えるなかで、旅行者に限らず、二地域・多拠点生活者や長期滞在者、移住者などの「不確実性の高い移動を伴う来訪者」(森重ら 2018:34)も、まちづくりにかかわることの重要性が指摘されていた。また、地域に住むことと地域の活動(例えば祭りやサークル活動)に関わることが必ずしも結びつかないことにも指摘されていた(森重ら 2018)。加えて映画等の舞台を訪れるコンテンツツーリズム研究の領域では、自分の居住地から遠く離れた場所であっても「居場所がある」と感じるという指摘が散見された。つまり、研究代表者が管見した限りでは、不確実性の高い移動を伴う人びとの「居場所」や「まちの居場所」に関する研究はほとんど見当たらなかった。

日本では、働き方改革が進められており、これには住まい方や休み方の変化が伴う。研究代表者は、国民の生活をより豊かなものにするためには、「複数のまちに住み、それぞれに居場所がある暮らし」や「旅先に自らの居場所がある社会」を実現していくことが望ましいと考えていた。すでに述べたとおり、「まちの居場所」に関する研究では、国民の一部の人びとしか扱われておらず、研究の余地が残されていた。

2. 研究の目的

研究開始当初の本研究の目的は、不確実性の高い移動を実践する人びとに対するヒアリング調査を通して、彼らの「まちの居場所」の獲得プロセスを解明し、その場所の特徴を明らかにすることだった。具体的な調査対象としては、季節労働者と二地域・多拠点居生活者(以下、複数拠点生活者とする)および国内旅行者に頻繁に出かける者(以下、高頻度旅行者とする)の3者とした。

3. 研究の方法

(1) 文献調査

書籍・論文等の文献資料を収集し、先行研究のレビューを行った。まず、都市計画や建築計画、社会福祉等の研究領域における「居場所」や「まちの居場所」、「サードプレイス」等の関連資料を収集・整理した。また、季節労働者と複数拠点生活者ならびに高頻度旅行者を対象に、「居場所」や「まちの居場所」、「サードプレイス」等について考察している先行研究を収集した。なお、日本の季節労働者の「居場所」等について取り上げた資料は研究代表者が管見したかぎり、ほとんど見当たらず、十分な文献資料を収集することはできなかった。

(2) ヒアリング調査・ウェブアンケート調査

複数拠点生活者や高頻度旅行者に対するヒアリング調査を実施した。それらの情報と先行研究で実施されていた質問票を参考にしながら、ウェブアンケート調査に必要な設問や選択肢を検討し、調査票を作成した。

4. 研究成果

まず、本研究の当初の研究実施期間は、2021年8月から2023年3月までの約1年半の計画であったが、COVID-19の収束がなかなか見通せない等の影響により2024年3月まで延長した。また、研究当初は、季節労働者と複数拠点生活者や高頻度旅行者という3者を調査対象としていたが、同様の理由により研究計画を見直し、季節労働者は調査対象から除外し、2022年以降は複数拠点生活者と高頻度旅行者の2者を調査対象としていくこととした。

(1) 複数拠点生活者に対するヒアリング調査を実施した。主な質問項目は、二拠点・多拠点の移動頻度(一ヶ月にどれくらいのペースで生活拠点を移るのか等)、二拠点・多拠点生活を行うことになったきっかけ・理由、思い思いに過ごすことができる場所や自然体でいられるような場所(居場所)の有無、その場所との関係の履歴(きっかけ、通う理由)などである。調査協力者は、アドレスホッパー1名、二拠点生活者2名、三拠点生活者1名である。これらの調査結果を参考にしながら、次の複数拠点生活者に対するウェブアンケート調査を作成した。

(2) 複数拠点生活者に対するウェブアンケート調査を実施した。まず、ヒアリング調査結果ならびに谷口ら(2012)や川村・谷口(2013)、山田・中岡(2020)等の先行研究を参考にしながら、調査票を作成した。本調査では、複数拠点生活者の主な居住地(以下、メイン居住地)と補助的・補完的な居住地(以下、サブ居住地)を対象に、「まちの居場所」の有無やその具体的な場所・施設、来訪頻度や同行者、「まちの居場所」となったきっかけ、サブ居住地に対する地域愛着等に関する質問を設定した。

本調査結果を速報的に報告することを目的とした報告書(石川 2022a)では、主に3つの点を明らかにした。

- (ア) 居住地のメイン・サブともに「まちの居場所がある」と回答した人は、全体の5~6割程度だった。一方、「まちの居場所はない」と回答した人のうち、「自宅や自室、職場が居場所であり、『まちの居場所』と感ずる場所・施設はない」を選択した人は、6割程度を占めた。さらに、「自宅や自室、職場を含め、どこにも居場所はない」を選択した人も一定数確認された(2022a: 12)。
- (イ) 「まちの居場所」の具体的な場所・施設を尋ねた結果、メイン居住地では10の場所・施設に回答が集まったが、サブ居住地では「喫茶店・カフェ」、「公園」、「小売店」、「複合商業施設」の4つの場所・施設にとどまった(2022a: 12)。
- (ウ) 「まちの居場所」の来訪目的や平均使用金額については、メイン居住地もサブ居住地も同様の結果となった。一方で、来訪理由や来訪頻度、平均滞在時間については、10ポイント程度の差異が確認される項目もあった(2022a: 12)。

また、複数拠点生活者の「まちの居場所」と地域愛着に関する実態を年代別に分析した論考(石川 2022b)では、サブ居住地に「まちの居場所」が「ない」あるいは「どちらともいえない」と回答した者よりも「ある」と回答した者のほうが、サブ居住地に対する地域愛着にポジティブな評価を示す可能性があるということを指摘した。この結果から、「ライフスタイルにかかわらず、多様な人びとが集い、互いに接点をもてるような場所が地域に複数存在することは、住民(いわゆる定住者)・複数拠点生活者・旅行者の三者にとって生きやすく、訪れやすいまちづくりにつながる」可能性を示唆した(石川 2022b: 260)。

(3) 高頻度旅行者の「まちの居場所」に関するウェブアンケート調査を実施した。JTB 総研の「高頻度層の旅行行動」に関する報告書や大方(2021)、じゃらんリサーチセンターの「通う旅・帰る旅」の需要・ポテンシャル調査等を参考にしながら、質問票を作成した。初めて訪れた旅行先に「まちの居場所」と感じるような施設等があるとは考えにくいと想定し、「旅行・レジャー・余暇活動(趣味やボランティア等)で、定期的・継続的に訪れている地域」をもとに、「まちの居場所」の有無等を質問するようにした。本調査結果は、今後学会等で発表する予定である。

【参考文献】

田中康裕(2021):「居場所の制度化と建築計画学における事例研究」, 日本建築学会計画系論文集, Voi.86, No.790, pp. 2609-2620, DOI <https://doi.org/10.3130/aija.86.2609> (2022年5月6日最終アクセス)。

森重昌之・海津ゆりえ・内田純一・敷田麻実(2018): 観光まちづくりの推進に向けた観光ガバナンス研究の動向と可能性, 観光研究, Vol.30, No.1, pp.29-36。

石川美澄(2022a): 二拠点・多拠点生活者の「まちの居場所」の実態に関する Web アンケート調査報告, 都市計画報告集, No.21, pp.8-13。

石川美澄(2022b): 複数拠点生活者の「まちの居場所」の有無と地域愛着に関する一考察: Web アンケート調査の年代別結果を基に, 第37回日本観光研究学会全国大会学術論文集, pp.255-260。

川村竜之介・谷口綾子(2013): まちなかの居場所が生活の質・地域への意識に与える影響に関する研究, 土木学会論文集 D3(土木計画学), Vol. 69 No. 5, pp.1_335-1_344, https://doi.org/10.2208/jscejipm.69.1_335, (2022年4月18日最終アクセス)。

山田崇史・中岡奈月(2020): 働く女性の居場所に関する研究: 一都三県 Web アンケート調査に基づく類型化およびモデル分析, 都市計画論文集, Vol.55, No.3, pp.1092-1099, <https://doi.org/10.11361/journalcpj.55.1092> (2022年4月18日最終アクセス)。

谷口綾子・今井唯・原文宏・石田東生(2012): 観光地における多様な主体の地域愛着の規定因に関する研究 - ニセコ・倶知安地域を事例として, 土木学会論文集 D3(土木計画学), Vol. 68, No. 5, pp. 1_551-1_562, https://doi.org/10.2208/jscejipm.68.i_551 (2022年4月18日最終アクセス)。

大方優子(2021): 旅行者と旅行先との関わりに関する実証研究 顧客エンゲージメントの視点から, 第36回日本観光研究学会全国大会学術論文集, pp.61-66。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 石川美澄	4. 巻 21
2. 論文標題 二拠点・多拠点生活者の「まちの居場所」の実態に関するWebアンケート調査報告	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 都市計画報告集	6. 最初と最後の頁 8-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11361/reportscpij.21.1_8	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石川美澄	4. 巻 2022.12
2. 論文標題 複数拠点生活者の「まちの居場所」の有無と地域愛着に関する一考察：Webアンケート調査の年代別結果を基に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第37回日本観光研究学会全国大会学術論文集	6. 最初と最後の頁 255-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石川美澄
2. 発表標題 二拠点・多拠点生活者の「まちの居場所」の実態に関するWebアンケート調査報告
3. 学会等名 2022年度日本都市計画学会全国大会 都市計画報告会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石川美澄
2. 発表標題 複数拠点生活者の「まちの居場所」の有無と地域愛着に関する一考察：Webアンケート調査の年代別結果を基に
3. 学会等名 第37回日本観光研究学会全国大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------